

ニホンザルの基礎生態と特定計画策定・運用のポイントについて

合同会社 東北野生動物保護管理センター代表 宇野壮春
(株)野生動物保護管理事務所 主任研究員 清野紘典

ニホンザル（以下、サル）は日本の固有種であり、ヒトを除く霊長類ではもっとも北に生息している。積雪地域に生息するサルは「snow monkey」と称され世界的に人気がある。数十から数百頭からなる群れを形成し、昼行性で音声によるコミュニケーションを行うことから、昼間に生息状況を目視確認できることが特徴である。群れは複雄複雌の母系社会であり、メスは出自群から離れることはなく、オスが群れを出入りする習性がある。これらの群れる・昼行性・母系社会という習性と他動物より優れた学習能力がサル管理のキーワードとなる。

戦中戦後の乱獲によって生息数が大幅に減少し、非狩猟鳥獣になった後、一部の地域では絶滅のおそれのある地域個体群がみられるものの、近年は全国的な傾向として穏やかに個体数が回復し分布が拡大している。高山帯から市街地まで幅広い環境を生息地とする高い適応力と、地上から樹上まで三次元的に行動する身体能力を併せ持つことが、農林業被害や生活被害、人身被害といった多様な人との軋轢を生む要因となっており、他の鳥獣より対策を複雑にしている。これまで対策の主軸となってきた有害捕獲は 1970 年代以降増加し続け、現在では全国で年間 2 万頭に達している。しかし、近年の農業被害額は 16 億円前後を推移する横這いで、増加する捕獲数に対して被害軽減効果が現れていない。その理由として、群れの特性を把握しないまま闇雲に捕獲しているため、適切な捕獲管理ができていないだけでなく、群れの社会性をかく乱して群れを分裂させ、小集団化による定着や群れ分散といった現象によって被害問題が煩雑化しているからである。このような現状において、管理目標を明確にし、捕獲だけではない総合的な被害防除対策とモニタリングを伴う科学的な管理を推進する重要性が増してきており、適正に管理計画が運用されている自治体では成果が現れている。

サルは管理の最小単位を群れとする「群れ管理」の考え方が基本であり、群れごとの分布・個体数・加害レベルといった個性を把握し、群れ特性と地域の実情にあった管理施策を展開することが必要である。そのための基本情報として、モニタリングは極めて重要な役割を果たす。クマやシカ、イノシシのように昼にその姿を確認するのが難しい種とは違い、昼間に目視できるサルは分布・個体数など圧倒的に正確な情報を知ることができる獣の一つであり、モニタリング方法は GPS 発信器やテレメトリーを利用した専門家による詳細な調査から、近年では低コストで群れの分布や加害レベルを推定できる調査方法（出没カレンダー調査）も開発が進んでいる。自治体によって分布の大小、被害の多少など地域性が異なることから地域の実情と予算に応じて各モニタリング方法を選択的に実施していくことが望ましい。

サル管理における被害防除対策のメニューや方法論はおおよそ出揃っており、モニタリングから明らかにした管理すべき群れの加害レベルや個体数等に応じて、市町村が主体的に対策を処方できる指針を特定計画のなかで示す一方、群れに対する対策とは別ベクトルで、集落環境点検や継続的な普及啓発活動によって被害を受けにくい集落づくりを強化するために関係部署との連携体制を整備した特定計画が求められる。

なお、サルにおいては過度な捕獲がたちまち地域個体群の絶滅という不可逆的な状況を招く危険性があり、保全と被害軽減のバランスに配慮した個体数管理目標の設定が必要である。近年では鳥獣被害防止特措法による地域被害防止計画での有害捕獲が促進しており、それらが保全上の問題を引き起こすことが懸念されるため、特定計画によって適正な個体数管理目標を定めて市町村の手引きとし、科学的手法でのモニタリングによって保全を担保できるシステムを構築していくことが課題である。

合同会社 東北野生動物保護管理センター × Wildlife Management Office

ニホンザルの基礎生態と 特定計画策定・運用のポイント

平成25年度特定鳥獣の保護管理に係る研修会（初級）

（東京）
（合）東北野生動物保護管理センター
代表 宇野壮春

（大阪）
（株）野生動物保護管理事務所
主任研究員 清野紘典

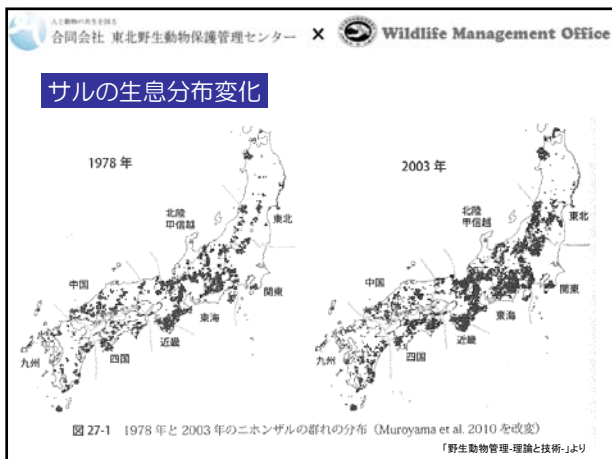
合同会社 東北野生動物保護管理センター × Wildlife Management Office

ニホンザルとは




- ・日本固有種
- ・北海道と沖縄には生息しない
- ・ヒト以外でもっとも北に生息する霊長類
- ・環境適応力が高い

第6回自然環境保全基礎調査
1992年～1996年 アンケート調査



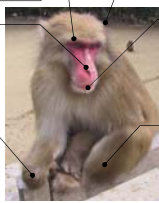
合同会社 東北野生動物保護管理センター × Wildlife Management Office

サルの身体能力と知能

【視覚】
特に優れている。視力不明。
色や形の見え方は人間とほぼ同じ。

【嗅覚】
人間とほぼ同じ。物を鼻に
近づけて臭いを嗅ぐ。

【触覚】
痛みや寒さには強い。
汚れは気になる。

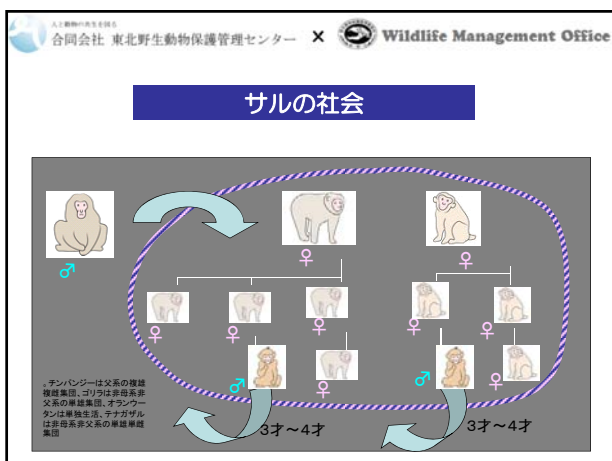


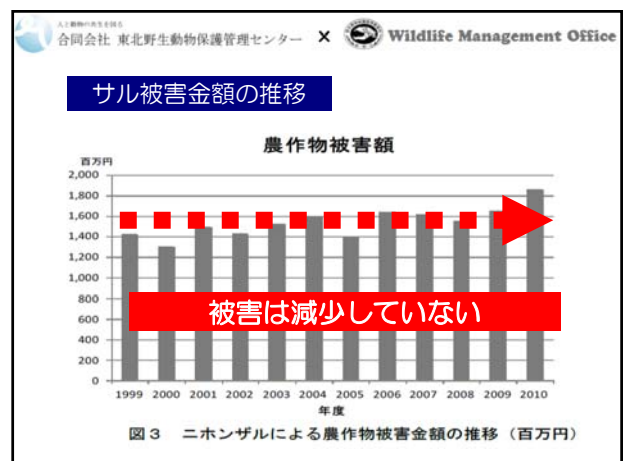
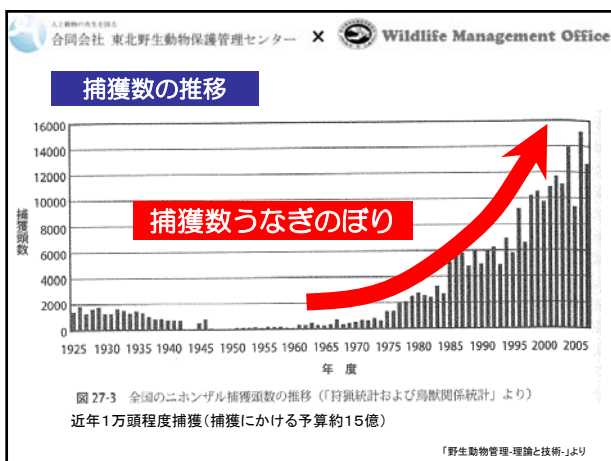
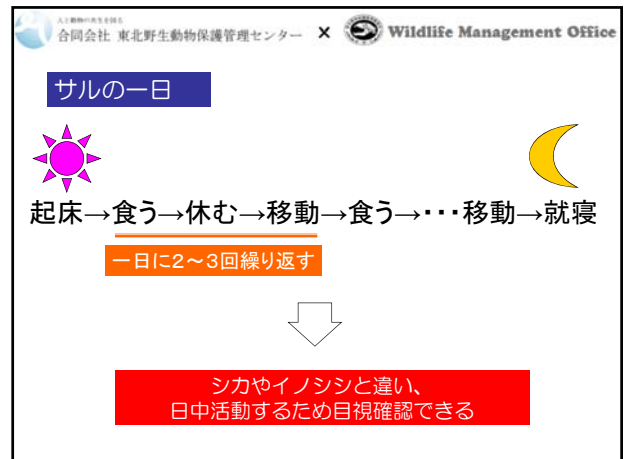
【聴覚】
人間とほぼ同じ。ただし、
音のみによる刺激は忘れ
やすい。

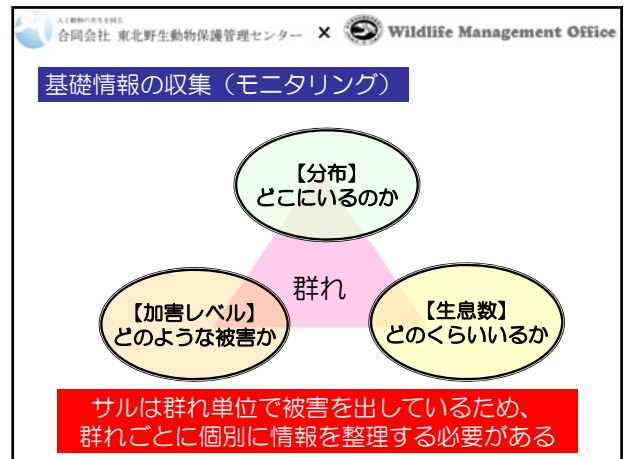
【味覚】
優れている。一度食べた
物の味は二度と忘れない。
食べた場所・時期も忘れ
ない。甘み成分に敏感。

【跳躍力・スピード】
2m程度なら飛び越えられ
る。100m15秒程度。

高い学習能力はあるが、知能は幼稚園児程度







合同会社 東北野生動物保護管理センター × Wildlife Management Office

基礎情報の収集

専門家による加害レベル判定・個体数調査等

発信器装着：群れ位置把握
(事例：滋賀県米原市、大津市等、全国多数)

合同会社 東北野生動物保護管理センター × Wildlife Management Office

基礎情報の収集

サル出没カレンダー調査

一定期間、一斉にサル出没状況を記録

カレンダー

合同会社 東北野生動物保護管理センター × Wildlife Management Office

基礎情報の収集

サル出没カレンダー調査 + テレメトリー調査

合同会社 東北野生動物保護管理センター × Wildlife Management Office

サル群れの個体数と加害レベルの把握

表5. 県内に生息する各群れと追跡オスの評価

まとり分け	群れの名称	群れの評価				追跡オスの評価			
		第1期	第2期	第3期	第4期	第1期	第2期	第3期	第4期
加東	小野田の群れ		B	A	B	D	E	D	E
	小野田A群 小野田B群		B-C			D		D	
仙台南	宮崎の群れ		C						
	奥宮崎 A群		F	WF	F	F			
	奥宮崎 B群		E	WF	F	F			
	伏見大滝A群		F	F	WF	F	F		
	伏見大滝B群		E	WF	F	F			
	定食の群れ		C	B	F	D	E		
	日の群れ		D	D-E	D-F	F			
	高倉山の群れ		E	E	D-E	D-E	D-E		
	龍崎の群れ		D	C	D	E	F		
	太郎の群れ		D	C-E	D	D			
七ヶ宿	七ヶ宿A群		F	E	F	F	F		
	七ヶ宿B群		F	E	F	F	F		
	七ヶ宿C群		F	E	F	F	F		
	七ヶ宿D群		F	E	F	F	F		
	七ヶ宿E群		F	E	F	F	F		
	七ヶ宿F群		E	E	D-E	F			
白石	戸沢の群れ		F	E	F	F	F		
	釜島の群れ		F	F	F	F	F		
大崎	鳴瀬石原A群		F	WF	F	F	F		
	鳴瀬石原B群		F	WF	F	F	F		

(第2期宮城県ニホンザル保護管理計画より引用)

